



蒼の虜



星野 澄華

美しく、この世で到底見ること叶わぬような蝶が、花の咲き乱れる春の野にひらりと飛んでいた。

その優美さに当てられたか、蝶を見留めたひとりの若者が近付いてきた。蝶は花に降り、飛び立とうとはしない。若者の掌が蝶を包み込むように捕らえた。そして、両親が亡くなって一人で住まう古い家へ持ち帰った。

狭い家の中で両手を開くと、蝶は若者が危惧したように弱ってはいなかった。むしろその翅は薄暗い中で輝くようだった。

蒼き翅を際立たせんという漆黒の筋もまた複雑な文様を描き、浮き上がる美しさに若者は時間も忘れてしばしの間見入った。

蝶は土間にある使い古された空の壺の上に止まり、あまり飛ぼうとはしなかった。それは若者を喜ばせた。好きなだけ眺めることができたからだ。

春の間、若者は夢のような刻を過ごした。野良仕事に出た帰り、蝶の好みそうな香りのよい草花を土ごと取ってきて、蜜を吸わせた。少しでも長く居て欲しいという若者の意を汲んだのか、いつも美しさは家で帰りを待っていた。幸せで仕方なかった。

夏の間も、蝶は生きていた。他の虫のように短命だと思っていた若者は、何も不思議に思うことなく、夏の里山に分け入って花々を取ってきた。時には木苺などを取ってくることもあった。

秋。花はほとんど見かけなくなっていた。紅葉した山や野から果実を取って引きつぶし、その汁を与えた。蝶はいつも家にいて、若者の寂しさを和らげてくれた。

しかし、間もなく辺りは冷たく凍える冬を迎える。その頃には、もう花はおろか果実もない。若者は蓄えたわずかな野菜や肉といった食料を干したり、塩漬けにしてこれまで何とか寒い季節を越していた。

寒さと蜜の枯渇。

若者はありったけの薪を割った。体を壊しかけるほどに、錆びて欠けた斧で決して太くはない薪を集めて割っていった。そうしなければいつ雪風に命を奪われるか分からない。しかし、どんなに薪を増やしても、夜明けになれば全て灰になり若者は冷気に目を覚まさせられるのが常だった。いつか自分は凍死して死ぬのではないだろうか、そればかりを心配して白い季節を過ごしてきた。春や夏に飛び交う蝶が、それで生きていられるとは思えなかった。それでなくても、随分と長く生きているのだ。いつ、冷たい床に落ちていても不思議ではない。愛した美しさが、そんな無残な死に方をするのは耐えられなかった。そうでなくてももっと良い場所で蝶を眺められていたらと、蝶をその手に入れた時から考えていた。大した金を稼ぐことも出来ず、自分のやせた畑の作物を食いつぶしながら生きるだけで精一杯の若者に新しく家を持つことなど不可能だった。

砂糖を市に出て買ってくることも出来ない。作物と引き換えに金を稼いでは自分の命さえ危ぶ

まれる。ただでさえ砂糖は高い。親が生きていた頃、何度か市に行ったことはあるが少ない量で何日も食べて暮らせる金額だった。今でも高価に違いない。砂糖を買い、それで砂糖水を作って蝶を生き永らえさせるのは夢物語以外の何物でもなかった。

選択肢などなかった。蝶は死せるしかないのだ。だが、その美しさに手をかけるなど、若者にとっては罪にしか思えなかった。

では、汚く狭い家の中で、その蒼い輝きを地に貶めるのかと自問すれば、それも出来ないのだった。

若者は泣いた。冬はもうすぐそこに迫り、息は白く、風は切れるように冷たかった。限界が来たのだ。覚悟しなくてはならない。

そして。山の木が裸になり、野に霜柱が立つようになる頃、若者は蝶と出会った場所にいた。両手は合わさり、まるであの春の日の再現である。ただ違うのは、そこは最早荒涼とした大地となっていることだ。

若者の眼は泣きはらしたせいで赤くなっていた。手に力がこもらないように、必死に涙をこらえている。

空は曇天。厚く墨を溶いた色をした雲が空を覆って、若者をさらに暗鬱な気持ちへ引き込んだ。

短い一生のほとんどを窮屈な場所に閉じ込めてしまったせめてもの罪滅ぼしと、空に放すことを思いついた。思いついてから何度も、決心してはそれをひっくり返し悩むことを繰り返した。

しかし、確実に近づく冬の足音を聞いて、どうしようもなく野に出た。迷いはまだ胸の内で燻ぶっていた。

震える両手をゆっくりと開いていく。輝きが掌から漏れ出してくるようだった。太陽は姿を現していないのに、光さえ零れてくるような気がした。

蝶が飛び立つのにそう時間はいらなかった。飛ぶというよりは浮かぶ風にして蝶は手を離れた。若者は息を飲んだ。後悔に顎までが震える。

蝶は餞別か、若者の周りを旋回した。そして高く舞い上がる。すると――。

空が割れた。

いや、実際には分厚い雲に割れ目が出来たのだ。澄んだ蒼穹が顔を覗かせる。

蝶はその蒼に吸い込まれるように、いつの間にか姿を消していた。

もう、若者は涙をぬぐうことも出来なかった。滝のように溢れる滴が木枯らしに冷やされてもそのままに、やがて地に伏して嗚咽を漏らした。両親を相次いで亡くした時もこれほどの悲しみは生まれなかった。

あの蝶は、若者の心を魅了し、虜にしたのだ。

ねえ、お祖父ちゃん、お祖母ちゃんの前に好きな人がいたって本当？

小さい頃に祖父に向かってそう聞いたことがあった。祖父は困った顔で笑って答えてくれなかったけど、いたんだなっていうことは子どもの僕にも分かった。何故僕がそんなことを何の配慮もなく訊ねたのかというと、祖母が娘、つまり僕の母にちらりと言っていたのを聞いてしまったからだ。遊びに行こうとして渡り廊下の方を見たら、縁側に腰掛けて煙管をふかす祖父が目に入り、子どもながらの単刀直入さで質問をした。今なら、そんな軽率なことはしなかつたらう。そんなことはあって当然だとさえ思ったかもしれない。

祖父が祖母である妻を迎えたのは当時してみればかなり遅かったという。祖母によれば、若い時分にどこにいたのかは決して話さなかったらしい。子どもにも恵まれ、裕福ではないなりに平穏な暮らしを過ごしていた。だが、祖母は時折遠くを見つめる祖父に対して、心の底で夫の気持ちの方が自分には向いていないことに気付いていた。だが、浮気をしている風でもなく、子煩悩な父の役割を果たす夫に何も言えなかった。自分にも色恋の経験が一つ二つとあったからだろう。しかし、選んだ男が真に自分を愛していないのだと思い知ることは辛かったに違いない。当時を知らない僕には想像するしかできないけれど。

ええ、いつかはこんなことになるような気がしていましたよ。お祖父さんはいつも誰かを追っている風でしたからね。

あの出来事の後、事の次第を伝えた僕に、祖母はそう言った。祖父に対して怒りや憎しみを感じていたようではなく、何か諦めたような笑みを浮かべて、少し疲れた顔をして。

ずっとあの人はどこか遠くを見ていた。最近は特に、気が付けばいつもそうだったの。本当に、いつか消えてしまいそうな気がした。体は健康そのものだったから、先に逝くとは思っていなかったけれど……もう、あの人は帰ってこないでしょうね。

確信を言葉に乗せながらも、祖母の目にうっすらと涙が浮かぶのを、僕は見なかった振りをした。ただ、祖父が老いるまで求めた人はどんな人だったのだろうと心底疑問に思った。祖母も綺麗な顔立ちの人で、祖父を老いても愛していたというのに、それでも振り返らせることのできないほど祖父を魅了した女性とはどんな人だったのだろう、と。

もしかすると、蝶のような人だったのかもしれないとふと思った。

祖父は蝶が好きだった。とはいっても、標本を採集することは嫌っていた。ただ、眺めて嘆息するだけだった。今思えば、それには切ない思慕の念があったのかもしれない。

影響を受けて、僕も興味を持つようになった。部屋には蝶だけを集めた図鑑がある。

祖父が消えた日も、庭に蝶が舞っていた。

あの日、夕方に学校から帰ると、庭に夕日が差し込んでいて眩しいほどだった。すべてが橙色に輝いて、思わず目を細めた。自分の部屋に行こうとした時、縁側に祖父が座っているのが見えた。僕の小さい頃までよく吸っていた煙管は、体に悪いと言われてもうほとんど吸わなくなっていた。僕と同じように目を細めて朱い庭を眺めている。庭には祖母が植えた花々が咲き乱れて甘い香りを漂わせている。その中に、香りに誘われたのだろう、一匹の蝶がひらりと花の間を縫って飛んでいる。見たことのない蝶だった。人よりずっと詳しいつもりだったが、その蝶の種類は全く分からなかった。少なくとも図鑑に載っていた記憶はない。ただ、とても美しいと感じた。橙色の光の中、塗りつぶされることなく翅の蒼さが輝いている。黒い筋がその蒼さを際立たせていた。

声もなく見とれていた僕の視界の端で、動くものがあった。祖父だ。腰を上げ、夢見心地でいるかのようにふらふらとした足取りで蝶の方へ歩を進める。

蝶は一つの花に留まっていた。祖父は手を伸ばせば触れることができる所まで近寄った。蝶は逃げずに、花卉が風に揺れるのに身を任せている。

祖父が肩を震わせた。薄く開いた口から、言葉を成さない声が聞こえてきた。俯く顔を影が黒く塗りつぶしていたけれど、何故だか泣いているのだと分かった。

もう一步近寄った。さらにもう一步。祖父はあともう一步踏み出せば花を踏みつけてしまうというところまで進んだ。蝶はまだ逃げない。

祖父が片手を伸ばした。蝶を捕まえようというのでないことは明らかだったが、僕には行動の意図が理解できなかった。

「 」

何か、祖父が呟きを洩らした。よく聞き取れない。ようやく声をかけようと思いついて口を開いた。

「お……」

お祖父ちゃんと、呼びかけることはできなかった。何故なら、いきなりの突風に邪魔をされたからだ。思わず腕を上げて体を庇う。反射的に目をつぶってしまっていた。

風が止み、瞼を開くともう日は沈んでいた。空の端に名残の橙があるだけで辺りは薄暗く、藍色の天蓋に星が瞬いていた。そして――。

祖父とあの蝶は、どこにもいなかった。

不思議に思って周辺を探すが、蝶どころか祖父の姿も見えない。家中を探していると、祖母と母とに不審そうに聞かれ、祖父がさっきまでそこにいたのにどこにもいないと話した。その時はしばらく様子を見ましょう、散歩に行ったのかもしれないし、夕飯までに帰ってこなければどうするか決めましょうということになった。祖父は健康だったために散歩が日課だった。しかし、そうではなからうというのは自然に感じた。

結局、父が勤めから帰ってきてても祖父は帰らず、母が顔を青くして、警察に連絡しようと言い出した。一週間、自治体や警察が捜索に全力を注いでくれたが、祖父は見つからなかった。祖母はもう諦めているようだった。あの人はもう帰ってこないわ、と静かにそう言った。

今も捜索願は取り下げられていない。

まもなく、死亡扱いになる。

神隠しのように一瞬で姿を消した祖父。祖父は、あの蝶に連れ去られたのだろうかとか空想的なことを思ったりもした。蝶が好きだった祖父のことだから、そうであったのなら逆に本望であっただろうとさえ考えた。

何処か花の咲く場所で蝶と戯れているのだろうか――。

夢を、見た。

夜の川べりに、若い男女が仲睦まじ気に腰を下ろしている。

幻想感漂うその夢は、蒼に彩られていた。

地上を照らす月光と、数えきれないほど飛び交う

幼い頃に祖父を連れ去ったあの蝶と同じ――。

